

「安息日の主」

ルカの福音書 6:1~5

はじめに

かつてイスラエルの民、ユダヤ人たちは、モーセの律法、十戒とも呼ばれる聖書の教え、戒めを落ち度なく厳格に、完璧に守り行うために、それに加えて新たな規則を設けました。それは、たとえるなら電車の駅のホームに引かれた白線のようなものです。基本的にはホームの下に降りないかぎり、ホームのどこに立っていても、やって来た電車にはねられる危険はないのですが、より安全性、確実性を持たせるために白線が引かれています。聖書の教えを破るという危険に対する、この白線となる教え、禁止命令事項が彼らの中には数多く存在します。その多くは書物に記されることによってではなく、言い伝え、口伝によって広まっていったために、聖書に記されたそれと区別して「口伝律法」とも呼ばれています。パリサイ人、律法学者と呼ばれる人々とはこの口伝律法を説く、教えるユダヤ人教師たちのことを指します。さらに民が口伝律法に則しているかどうかを常に監視、監督し、従わない者には指導、刑罰を与える権威を持っていました。そんな彼らが特に注力して広めた教えの一つに「安息日」があります。今日の箇所はこの「安息日」についての彼らとイエシュアの間答となっています。「安息日論争」とも呼ばれるこの議論は、ルカの福音書には4箇所（6:1~5、6:6~11、13:10~17、14:1~6）にあり、今日はその一つ目になります。



安息日、それは毎週私たちが集まっているこの日曜日のことではありません。ユダヤ人たちは金曜日の夕方から土曜日の夕方までがそれにあたるとしていますが、それはもともとモーセの律法、十戒とも呼ばれる以下の御言葉に基づく教えです。

出エジプト記【新改訳 2017】

20:8 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。

20:11 それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。

口伝律法を記した書物の一つ「ミシュナー」、その中のシャバット（安息日という意味）7:2 という箇所には、安息日に避けるべき 39 種類の労働、仕事記されているそうです。そしてそれはさらに細分化され、数多くの禁止命令事項が記されており、その数はなんと 1500 項目以上にものぼるそうです。今日も「イスラエルとは、安息日の規定を守り行うために存在している」、「すべてのユダヤ人がこの安息日の規定を正しく行ったら、メシアが来る」とまで教えているほどに、パリサイ人をはじめとする口伝律法の教師たちのこの安息日に対する情熱、執着、拘りは、並々ならぬものがあるのです。しかしそれは、人の正

しい行いが、人が神の教えを守り行うことが、つまり人の行いが、人の業が神の奇蹟を引き起こし、救いをもたらすのだという誤り、偽りの教えです。イエシュアはこれを以下のように正されました。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

5:46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずですよ。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

このように、聖書に記された律法とはすべてイエシュアとはどのような御方か、イエシュアが何をなされるのか、ということを表したものであるとイエシュアご自身が解き明かされたのです。では、今日の箇所にあるこの安息日とは一体イエシュアの何を表し、イエシュアが何をなされることが表されたものであるのかを見てまいりたいと思います。

1. 麦畑

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:1 ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。

6:2 すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。「なぜあなたがたは、安息日にはならないことをするのですか。」

6:3 イエスは彼らに答えられた。「ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、

6:4 どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」

6:5 そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」

まず誤解しないでいただきたいことは、ここでイエシュアの弟子たちは無断で人の畑に入り、勝手にそこから取って食べているわけなのですが、これは私たちの社会ではれっきとした犯罪ですが、モーセの律法にはこう記されているのです。

申命記【新改訳 2017】

23:24 隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。

23:25 隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。

このように、厳しい、難しい印象が強い律法ですが、中には貧しい人、飢えている人に対する思いやり、温情措置が命じられているものもあるのです。ですからこの点に関してイエシュアの弟子たちが訴えられるのではないことを覚えてください。ここでパリサイ人たちが言っている、責めているのはやはり「安息日にはならないこと」という、口伝律法の中にある禁止事項に触れるものだという事です。それによると、まずそもそも安息日には、麦畑はもちろんのこと、草の上さえ歩いてはいけないという規定があ

りました。その理由は、麦などの実のなる草花を踏むと、それは作物の収穫という労働をしたことになるからだそうです。ですから手で麦の穂を摘むなど言語道断というわけです。また手で麦をもみ出す行為は脱穀作業、そしてさらにその場で歩きながら食べることは食事とは見なされず、貯蔵作業、倉に納める労働になるそうです。さらにさらに足が風を巻き上げ、麦のもみ殻を飛ばす可能性があり、これはもみ殻の選別作業、落ちた麦を鳥が来て食べる可能性があるのもそれは貯蔵にあたる、というのです。どんだけ～

このように、聖書を禁止命令事項の本として捉えることがいかに愚かで滑稽なことになるかということをご覚悟しましょう。

2. ダビデ

パリサイ人たちのこの訴えに対して、イエシュアはもちろん聖書に記されている事実を用いて反論されます。ここでイエシュアが語っておられるダビデについての記述とは以下のものです。

サムエル記【新改訳 2017】

21:1 ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに来た。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて言った。「なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか。」

21:2 ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、あることを命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じたことについては、何も人に知らせてはならない』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。」

21:3 今、お手もとに何かあったら、パン五つでも、ある物を下さい。」

21:4 祭司はダビデに答えて言った。「手もとには、普通のパンはありません。ですが、もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら、聖別されたパンはあります。」

21:5 ダビデは祭司に答えて言った。「実際、私が以前戦いに出て行ったときと同じように、女たちは私たちから遠ざけられています。若い者たちのからだは聖別されています。普通の旅でもそうですから、まして今日、彼らのからだは聖別されています。」

21:6 祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、温かいパンと置き換えるために、**その日【主】**の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである。

これはダビデが当時仕えていたサウル王から密命を受け、遣わされているかのように記されていますが、実際はそのサウルから命を狙われ、ダビデはこの時逃げる途上にあつたのです。ここで彼が祭司から受け取った「聖別されたパン」「臨在のパン」とは本来、祭司だけが食べることを許された、祭司以外のものが食べてはならなかったパンでした。

レビ記【新改訳 2017】

24:5 あなたは小麦粉を取り、それで輪形パン十二個を焼く。一つの輪形パンは十分の二エパである。

24:6 それを【主】の前のきよい机の上に一列六つずつ、二列に置く。

24:7 それぞれの列に純粋な乳香を添え、覚えの分のパンとし、【主】への食物のささげ物とする。

24:8 彼は**安息日**ごとに、これを【主】の前に絶えず整えておく。これはイスラエルの子らによるささげ物であって、永遠の契約である。

24:9 これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。これは最も聖なるものであり、【主】への食物のささげ物のうちから、永遠の定めにより彼に与えられた割り当てだからである。」

このようにダビデは「安息日」に「永遠の定め」として祭司だけに許された「最も聖なるもの」を受け取ったのです。これは完全にモーセの律法に反する行為です。しかしこの時のダビデのように、虐げられ、命を狙われ、しかも貧しく、空腹で、誰も頼るものもない者に対して、律法を、安息日を造られた神は、つねに憐れみ深くあられるということ、ダビデについて記された聖書の事実を用いて、イエシュアは述べられたのです。すべてを捨ててイエシュアに従ってきた弟子たちはみな物質的に貧しく、そしてこの時彼らは空腹、飢えていました。このような者に対する神の恵みがあることをイエシュアはここで説かれたのでした。

そしてここには重要な対比が表されています。それは、イエシュアにつき従って歩く弟子たちが麦を食べる姿と、主の宮で聖別されたパンを受け取るダビデの姿が重ねられているのです。並行箇所であるマタイの福音書 12:6 ではイエシュアがご自分を指して「ここに宮よりも大いなるものがあります」と言っておられます。またダビデはここで「パン五つ」を求めたともありますが、これはトラーとも呼ばれる、モーセの律法が記されたモーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）を指し示すものです。ですからここでイエシュアが安息日とは何かということについて示しておられることは、安息日とは、人が、ではなく安息日にイエシュアがなすべきことは、虐げられ、空腹で、神を、天から下って来るまことのパンであるイエシュアを、その宮を求めて、頼って来る者にあわれみをかけてやること、その空腹を癒し、満たしてあげることだとイエシュアは教えておられるのです。神は、イエシュアは「あなたは祭司の家系ではないから、律法に従わない罪人だから、異邦人だから」と言って責めたて、拒絶し迫害する御方ではなく、ご自身を呼び求める者を救い出し、回復させる御方であるということがここに示されているのです。

ちなみに、安息日でも主の宮に仕える祭司たちは、休むことなくその務めを果たすこと、つまり安息日でも働くことが命じられていました（民数記 28:9）。ですからそもそも安息日における労働禁止の事項は、祭司だけは例外だったわけです（マタイ 12:5）。つまり、イエシュアはご自分の弟子たちを、主の宮の祭司として見ておられた、選ばれたということがここには表されているのです。

3. 神の国の安息

今日の箇所から、安息日、安息とは飢えと虐げ、つまり苦しみの中で主イエシュアを求める者に対してかけられる神のあわれみによる癒し、満たし、回復です。その究極はもちろん「御国、神の国」です。この安息と「神の国」との関連性を、パウロはテサロニケの教会に宛てた手紙の中で以下のように記しています。

Ⅱテサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

1:4 ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。

1:5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

1:6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、
1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、
主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。

当時の教会は、二つの迫害を受けていました。一つは皇帝崇拜を強いるローマ帝国からのものと、もう一つは今日取り上げたユダヤ教、口伝律法の教師たちからの迫害がありました。さらには教会の中に異なる様々な教え、聖書解釈が生まれ、これは今日にまで及んでいます。教会が教会を批判し、牧師が牧師を、牧師が信徒を、信徒が牧師を、信徒が信徒を、絶えず批判し、裁き合っています。国によっては今日もお国家権力から、または他の宗教宗派からの激しい迫害を受け続けている教会も存在します。この困難、問題を解決する術は、「安息を与える」方法は、私たちの側にはありません。それは「主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こる」「神の国」によってのみ、私たちは安息を得る、安息日を迎えることができるのです。ここでパウロは、私たち教会がこの安息「神の国」を受け取るにふさわしい者としてのその「証拠」証しとして「あらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保って」今を生きることが、神から与えられていると述べています。これは人間的には決して嬉しいものではありませんが、私たちがイエシュアを、その御名を、御国を求めるためには必要不可欠なものなのです。鳥の巣でひなが口を大きくあけて鳴く姿を見たことがありますか。ひなが鳴くのはお腹がすいているからです。そしてえさをくわえて帰って来た親鳥を見るからです。だから私たちも空腹で、貧しくて、辛いと感じ、それを癒し、満たしてくださる唯一の御方、主イエシュアを、その再臨に「神の国」に目を留めなければ鳴けないのです。主を呼び求められないのです。この肉の眼に移る虚しい光景や偽りの情報、周りの人々、そして自分自身に目を留めてはいけません。



ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

22:21 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。

ただ誤解しないでいただきたいことは、私は「神の国」を熱心に求めることをしなければそれは与えられませんよ、というような脅しをかけているのではありません。今日、もしあなたが心や身体に悩みや痛み、苦しみをかかえているならば、それは「神の国」の到来、主イエシュアの再臨を求めるための力となるものであり、つまりその苦しみには意味があり、それはつまり益であり、神からの良い賜物であるということをお伝えしたいのです。今すべてが順調で幸せだと感じているならそれも結構です。しかしもし抱えている悩みや苦しみを、ごまかしたり、あるいはあきらめたりしているのなら、それは神の恵みを無駄にしている、真実から目をそらしているのではないかと私は思います。パウロが書いたように、迫害や苦難は私たちが「神の国」に入ることの証し、証拠なのです。ですからどうぞ、飢え渇き、悩み、苦しみを覚える者であってください。そしてそれが「神の国」を求める力、信仰となるようにと祈ります。